

第 6 章

第 58 回日米学生会議概要

事業内容

**Examining the Future of the Japan-America Relationship
Within the Global Framework**

二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～

1934年、満州事変以降失われつつあった日米相互の信頼回復が急務であるという認識を持った日本人学生たちにより、日米学生会議は創設された。この日本初の国際的學生交流団体は「世界平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という創立当時の信念に基づき、様々な試練を生き抜き現在まで継続されてきた。日米学生会議は創立以来、学生の相互理解と友情、信頼を醸成し続け、毎夏日米交互で行われる約一ヶ月間の会議は、すべて学生の手で企画・運営されている。

第58回日米学生会議は「二国間を超えた未来～伝統への回帰と私たちの挑戦～」“Examining the Future of the Japan-America Relationship Within the Global Framework”というテーマの下、イサカ、ニューヨーク、ワシントンDC、オクラホマ、サンフランシスコで開催される。

イサカでは、参加者の交流を図る。その上で会議の土台を形作り、ヴィジョンを共有し、一ヶ月の戦略を立てる。ニューヨークでは、グラウンドゼロや国連本部へのフィールドトリップや企業訪問を通し、グローバリゼーションの中心を体感する。アメリカ政治の中核であるワシントンDCでは、ネイティブアメリカンについて学びアメリカという国の起源に触れるなど、それぞれの分科会の方針に沿った資料館などを訪れる。そしてアフリカプロジェクトにより、アフリカにおける貧困から人権問題まで、いわばグローバリゼーションの周辺、あるいは外側に位置する人びとと話し合う。オクラホマでは、ブッシュ政権を支える人々と直に触れ合い、彼らの宗教観やライフスタイルを知ることで、アメリカの根底にある価値観を体感する。また、アメリカでネイティブアメリカンが最も多く住む地域として知られるこの地で得るものは多いであろう。そして、最後に訪れるサンフランシスコでは、ビジネスの現場に飛び込み、その現状を把握する。この地は一ヶ月の成果を発信するフォーラムの開催地でもある。

日米間と太平洋の、そして世界の平和の実現のために、学生もその一翼を担わなくてはならない。創設当初からのこの理念を、参加者一人ひとりがそれぞれの価値観から再構築し、一ヶ月間のさまざまな活動を通し体感する。異なる価値観がぶつかり合い、互いの問題意識からの切り口で考え、それぞれの力がひとつの目的に向かってはじめて、それは実現する。

グローバルな枠組みからもう一度世界を捉え、その上で日米関係の未来を見つめなおす。日米関係を検証しなおし、未来へと目を向けるべき時が来たのだ。

そのためには、現地に生きる人びとの声や、普段は触れ合うことのない人びとの声に真摯に耳を傾けることが必要不可欠である。それらの経験から得たものについて、異なるバックグラウンドを持ち、多様な価値観を有する学生たちが活発に意見を交わし、ともにひとつの目標に向かってその能力を存分に発揮する。本会議中の分科会やフィールドトリップはもちろん、事前の勉強会やワークショップなど、多種多様なテーマと切り口を持ったプログラムはすべてが繋がりを持つ。そして参加者の一ヶ月間を通した有機的協働から生まれた成果を目に見える形式で社会に向け発信し、社会に影響を与えることを目的とする。

また、公式・非公式と場を問わず交わされる参加者同士の議論、相互理解による真の交流により、長期的視野に立った人材の育成と社会貢献を目指す。伝統をそれぞれの胸の内に継承し、かつ新たな挑戦を生むような、第58回日米学生会議を作り上げたい。2006年夏の経験を胸に、成長した参加者がそれぞれの方法で「未来」と飛び立っていただければ幸いである。

開催地および開催期間

開催期間

2006年7月27日 ～8月21日

ニューヨーク州 イサカ (コーネル大学)

(7月27日～7月31日)

「ニューヨーク」と聞くと、花やかで多忙なマンハッタンの風景を思い浮かべがちだが、北の方へ行くとがらりと景色が変わる。この古き良き町イサカは、決して大きくはないが全米でトップレベルを誇るホテル学科を持つコーネル大学やワイン醸造所で知られ、フィンガーレイクス付近の自然に恵まれた活気のある地域である。リベラルな思想を持つ人が多い中、ネオコンとして有名な世界銀行総裁ポール・ウォルフォウィッツ氏もこの町出身であり、伝統的な保守も存在している。ここでは始めのサイトとして相応しい、チームワークを有するアスレチックを通し参加者同士の信頼関係を築き、コミュニティーサービスを通して米国郊外の人々の生活に触れるのを狙いとする。

ワシントン D.C.

(7月31日～8月9日)

ワシントン D.C.はホワイトハウス、連邦議会議事堂、連邦最高裁判所と三権の最高機関が集まるアメリカ合衆国の首都である。同時にアメリカ全体の歴史や文化に関連した多数の博物館もある等、政治的に中立である必要から北部と南部の間に作られたこの人工都市は見事にアメリカ全体を集約する場所であると言えよう。ワシントン D.C.サイトでは、アメリカ政府で責任ある立場におられる方からお話を聞くことで現代のアメリカの政治的な動向を知り、また世界各国から集まる外交に携わる方々やあるいはNGOの方々から多様な価値観の下で21世紀の世界観についてのお話を聞き、我々に出来る世界貢献を考える。

オクラホマ

(8月9日～8月14日)

オクラホマは、他の南部各州と同じく圧倒的なプロテスタントの影響の下、伝統的に保守的な地域であり、リベラルと保守の間を行きつ戻りつするアメリカ大統領選挙にも影響を与えてきた地域である。本サイトは、ホームステイ等の地元交流を通じて、ややもすれば批判を受けるアメリカ現政権を支える人々のお話を聞くことで伝統的なアメリカ保守系市民の世界観、政治観を理解することを目的とする。一方でオクラホマは、ネイティブアメリカンの多い地域でもあり、多人種の移民国家であるアメリカの中で伝統的にマイノリティであった先住民の価値観や政治観を、お話を聞くことを通して理解する。

サン・フランシスコ

(8月14日～8月21日)

サン・フランシスコは日系を含む様々な人たちが移住した場所であり、パークレーなどの学園都市で若者文化が栄えているところでもあり、第二次世界大戦の跡が残る町でもある。

同時に、ゴールデン・ゲート・ブリッジなど観光名所も多い。実際に日系

人として戦時中に収容された人の話を聞いたり、博物館に行ったりすることで日系アメリカ人、そしてアメリカにおける移民の位置づけに関して考えてみたい。同時に、サン・フランシスコには港町として様々なビジネスが盛んなので、そうしたビジネスを訪問し、日米社会に関して考察してみたい。ボランティアへの参加や、教会などの現地に住む人と交流できる機会を活用し、西海岸の人の考えとその多様性に触れたい。

会議の過程

第57回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側は主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC.Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。参加者が決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行い、夏の本会議に望む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヶ月にわたって共同生活を送る。本会議中の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第58回会議のテーマである「二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップや社会活動では、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論のみにとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会へ向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第58回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

分科会活動は、本会議中の議論やフィールドワークのみならず事前勉強会や議論を円滑に進めるための事前レポート作成が含まれ、まさに第58回日米学生会議の中核となる活動である。分科会を通して得た知識や経験を下に、学生としてできる社会貢献について模索し、本会議そして事後活動の中でそれらを実践していきたい。こうした問題意識の下、日米、そして世界の未来を担う私たちが今議論すべきことを考え、7つの分科会を立ち上げた。

- ・ 科学技術と社会
Science and Society: The implication of Innovation
- ・ 市民参加の発展と非国家主体
The Evolution of Civic Participation: Non-state Actors and Transnational Politics
- ・ 開発：貧困と発展
International Development: Poverty and Progress
- ・ 多文化主義とマイノリティー
Global Mobility: Multicultural Issues and Community Building
- ・ 外交と国家ブランディング
National Identity and International Perceptions

- ・文化とアイデンティティー

Global Subculture: Creation of "Reality" in Imagined Communities

- ・多国籍企業とビジネスモデル

Designing a Global Company: Responsibilities and Strategies

フィールドトリップ

分科会の議題や各開催値に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

Special Topic(ST)

論題が既に固定された分科会とは異なり、参加者が個々の興味や時宜に沿った論題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行う。参加者の主体的・自発的な参加により、問題発見・論題設定能力を養う。同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

昨年のトピック例) 人権、他民族社会、恋愛、NGOの紹介など

Conference Wide Discussion(CWD)

日米二国間の問題・アジアと日米の国際関係に関する、全体共通のトピックに関して議論する。世界へ向けた日米関係を構築するため、未来へ向けての提言を考える機会を提供する。

フォーラム

会議の最終開催地、サンフランシスコで行われる。本会議における分科会の議論の発表など、第58回日米学生会議の成果を提示する。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会へ発信することを目標とする。そして、この会議が学生の自己満足で終わる事のないよう、各人が自ら積極的に社会に関わり、発信していき続ける事を再認識する場でもある。

Conference Wide Reflection(CWR)

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己の振り返りを深め、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

